

『一緒に始めるデュオキャンプ』

特典シナリオ台本

【登場人物】

長峰 波奈（ながみね・はな）

一人称「わたし」「はなさん」。

色んな事に興味があつて、まずやってみたいと動く行動派。

ものぐさながらに付き合いのいいあなたを誘い、初めてのキャンプに向かう。

なんでも自分でやってみたい性分で、それが結果的に世話焼きになっている。が、そそっかしく大雑把なところがあり、あなたがフォローすることもしばしば。いいバランスで付き合い続けて2年目になる。

恥ずかしがりやだが、あなたには積極的に好意を伝え、遠慮なく甘えて、甘やかしてくる。裏表がなくまっすぐ。

実家暮らしで、上に姉が二人いる末っ子の波奈は、いつも可愛がられて育ってきた。いつまでも自分が子供っぽいような、独り立ちできずにいるような自信のなさがある。

でも、「気になったことをなんでもやってみる」と意識して過ごし、大人としての生活をあなたと一緒に楽しんでいる。

あなたと一緒にだからこそ、波奈は色んなことに挑戦する勇気が出るらしい。

（甘やかしたい、大人っぽくなりたい女の子。）

《年齢》 24歳

《身長》 153センチ

《バスト》 C

あなた

ものぐさな性格だが、波奈の誘いには応じる。

高校で出会った波奈とは大学卒業と同時に付き合いはじめて2年が経つ。

面倒を避けるため、飄々と立ち回りクールな雰囲気が漂う。

そのせいで大人っぽく見られてきたが、実はとても子供っぽくて甘えたがり。

自分からは何か新しいことに触れるのが苦手な性質のため、波奈があれこれというについては巻き込んでくれるのが嬉しい。

すべての準備を用意してもらえたらアクティビティにも積極的に参加するタイプ。要領はよく、説明書を読めば一度でコツをつかんでしまう。

一人暮らし六年目。来年、波奈と同棲を始める予定。

（甘えたい、子供のままでいたい女の子。）

《年齢》 24歳

《身長》 166センチ

《バスト》 D

【あらすじ】

あなたは波奈と高校で出会って、大学卒業と同時に恋仲になった。

高校の頃から好奇心旺盛な波奈に連れられ、色々な体験をしてきたあなたは、ある日キャンプに誘われる。

生来面倒臭がりなあなたに、波奈は「ぜんぶ私がやるから！」と約束。

波奈の車と、おさがりのキャンプ道具。

あなたは身一つだけを波奈の車に乗せて、オートキャンプ場へやってきた。ひっそりとした山の中、豊かな自然に囲まれて、波奈と過ごす一泊二日のキャンプ。

誰にも邪魔されない、ふたりきりのひとときを静かに味わう音声作品です。

【EP01：今夜はここに住もう】

○オートキャンプ場・区画前

キャンプ場に車で到着。

波奈は運転席、私は助手席。

「……ついた」

「わぁ……大自然だぁ……（周囲を見渡す）」

「……（深呼吸）」

「（周囲を見回して）あんまり人、いない」

「（私に囁き声で）ラッキーだね」

「あらためて…付き合ってくれてありがとう」

「今日ね、すごく楽しみだった」

「ここに、新居を建てる……ふたりの家」

「一泊二日だけど」

「どうかな？ ……ね、楽しみ」

「……（笑って）まだなんにもないけど」

「じゃあ、荷物おろそ」

「（隣へきた私へ）うん？ 休んでていいよ」

「今日は、私がぜんぶやってあげる約束」

「こういうの好き」

荷下ろしは単純作業なので、手伝えると申し出る私。
私の行動を見てよろこぶ波奈。

「……手伝ってくれるの？」

「やさしい。すきー……」

「じゃ、一緒にがんばろ」

荷下ろしをはじめの私と波奈。
波奈はわくわく、アイテムを紹介しながら私へパスする。
テント用品、簡易テーブルとイス、火起こし道具、調理道具、
クーラーボックス。

「（引っ張り出しながら）まずはこの、でっかい、タープを……」

「（私へ渡しながら）ちょっと重いよ」

「……よっと」

「……んしょ、こっちはね、テント」

「はい。軽いでしょ？ びっくりでしょ」

「で、……これはテントのパーツ」

「これも……テントのパーツかな。…あ、うん、そうだそうだ」

「はい、ちょっと大きい……テーブル。んしょっ……」

「……ふう」

「はい、こっちは椅子」

「そう、二人掛けのやつ。折りたたみ式でコンパクト」

「ほら」

「ね、けっこうすごい。しっかり」

「あ、寝袋とマットは……まだいいかな、またあとで」

「毛布もあるよ」

「毛布はね、足りなかったらフロントでも貸してくれる」

「……借りとく？ うん、一応。あとで行こう」

「で、これは文明の利器……火起こしのための道具」

「へへへ……楽しみ」

「さて、じゃあまずは……タープを張る」

「これね」

ファスナーを開けて、道具一式を並べる。

巻いてあるタープを取り出し地面に並べる。

波奈、タープ用のテントポールを組み立てながら、

「このタープは、ひとりで組み立てられるやつ」

「……この日のために、練習してきた。……動画をいっぱい見た」

「見てて。……応援してて」

「そこ、座ってて」

波奈、私を組み立てたベンチに座らせる。
私の見守るなか、タープを広げる波奈。

「（広げながら）んしょ、えっとね、タープというのは……テントではなく……」

「なんか……屋根？」

「テントの前にスペース作って、テーブル置いたりする」

「で……」

「んしょ……」

「なんか、くつろぎスペース？ ……だよ」

「（広げ終わり）…よし」

「で、ポールを置く」

戻ってくる波奈。足元にポールを置く。

「向こうにも……」

反対側へ歩いてく。

「……っと」

ポールを置く。

「で……」

「（しゃがんで）んしょ」

「でね、ペグを打つ…」

「んん」

しゃがんだまま移動する。

「……ここかな」

「あっちも…」

「（立ち上がって）ん…」

波奈、歩いて反対側へ。

「（ペグを打って）ここと」

「ここも……っと」

「（ペグを打って）んっ」

「（立ち上がって）よしー」

「それで、次はロープ」

「（私の方を見て）…そっちだ」

「待って、一旦、説明書…」

タープバッグのなかを漁る。

「（読みながら）ふんふん……」

「（確認）ロープを、タープの…グロメント…に通して、こっちはポールに、あっちはペグにひっかける…」

「…OK。たぶん」

「ん…（ロープをひっかける。2本）」

「で…」

波奈、歩く。2ゝ3歩。

「（ロープ先端をペグにかけて）ん」

波奈、歩く。2ゝ3歩。

「（ペグにかけて）んっ」

「で、あっち」

波奈、歩く。4ゝ5歩。

「（しゃがんで）ん…」

「これだ。ん…（ロープ結ぶ×2）」

「よしゝ…」

「（ペグにかけて）ん…」

「（ペグにかけて）んっ」

「（俯いてた身体を伸ばして）んーっ…！ …はあゝ」

「で、ポールを…起こす」

「（感激）おー…」

「（ちょっと重たくて）おお…」

「ね、…そっち側、起こせる？」

ベンチから立ち、ポールを起こす私。

「ありがとう」

波奈、ロープを調整する。

「（調整しながら）ん、っと……」

「んっ」

波奈、私のほうへ戻ってくる。

ロープを調整する。

「（調整しながら）こっちも……ちょっと調整」

「これで…いいかんじ、かな？」

「まだ完成じゃないです」

「これだけだとシート干したみたいな…」

「あと四か所。もうちょっと」

一歩ほど歩き、しゃがむ波奈。

「（ロープを引いて）…、で」

「（ペグを打ち）…ん」

「（立って）よし」

波奈、2〜3歩ほど移動。しゃがむ。

「（ロープを引いて）ん…」

「（ペグを打ち）んっ」

「（立って）しょ……」

「(歩いて) ……」

波奈、2ゝ3歩ほど移動。しゃがむ。

「(ロープを引いて、かけて) …ん」

「(ペグを打ち終わって) よし」

「(立って) ……」

「(歩いて) さいごー」

波奈、2ゝ3歩ほど移動。しゃがむ。

「(ロープを引いて、ペグにかけて) ……で」

「(ペグを打つ) ん…!」

「…(立ち上がって、伸び) はあゝ」

「…これで、よしっ」

「…(達成感で微笑む)」

「…ちょっと休もう」

「(私のそばで) ……へへ」

「テントはねえ、もっと簡単」

「これ、袋から出すでしょ…」

「それで…放り投げるの。えいって」

ワンタッチテントを放りなげる。

「できた」

「ね、なんかひみつ道具みたいでしょ」

「あっというまに家が建った」

「新築庭付き駐車場付き一戸建て（笑う）」

「私たちのお城」

「……お城って程じゃないな」

「秘密基地？」

「隠れては、ない…？（笑う）」

「でも、いいね」

「で、飛ばないように、これもペグ打ちね」

「……いいぞ、慣れてきたかも」

「よいしょっ……」

「ん……」

「これで、……よしっ」と

「（伸びをしながら）ふぁー、できたあ」

「…（満足げに）ペグ打ち屋さんになろうかな」

「（冗談めかして）……お客さん、内見します？」

「波奈不動産、いちおしの物件ですよ」

「どうぞー」

入り口を開けっぱなしにしたテントの中。
二人で寝転がる。

「あゝ……（寝転がる）」

「まだ固いい……」

「エアマットあとで運ぼうね」

「……ごつごつ。ふふ」

寝返りを打って天井を見上げる。

「けっこう広く感じる……ね」

「悪くないでしょ？」

「はぁ……」

テントを気に入った様子の私を見て、微笑む波奈。

「もう、ここに住んじゃう？」

「……ぶちぬきワンフロア？」

「手を伸ばすまでもなく、すぐ……」

「届いちゃう、ね」

私に抱き着く波奈。私を見つめる。

「ほら、もうぎゅーってしちゃえる」

「はー……ぎゅー……」

「んー？ 補充してる……」

「（甘えがにじみ出て）……がんばったからあ」

「車の運転中は、顔もあんまり見れないし、触れない、ぎゅーできない……」

「そのぶん……」

「（あなたにほっぺたをくつつけて）んん……ほっぺた、むにむに……」

「あ……」

「（笑う）……元気出る」

波奈をねぎらう私。

「んー？ いいのいいの」

「運転も、キャンプも、私がやりたいって言い出したんだよ」

「付き合ってくれてありがとね」

「うん、ね。『面倒そう』ってずっと言ってたけどさ……」

「いざ来ると、楽しいでしょ？」

「ね。いつも始めちゃえば楽しんでくれるからさ……」

「そういうところ、すき」

「（笑いあう）……」

「（ハグ、ふざけあう雰囲気）ぎゅっ、ぎゅ。ぎゅー」

「（満足して）はー……」

「……（微笑む吐息）」

寝返りを打ち、天井を見上げる。

「ふはー……」

「………はー」

「………（深呼吸）」

ふたりでテントの天井を見上げて深呼吸。

「……よし。次の仕事」

「火起こし。楽しみにしてた」

「家で練習は……できなかったけど」

「イメトレしてたから、任せて」

「（笑う吐息）……」

身体を起こすふたり。テントを出ていく。

【EP02：心をいめて火をつけて】

○テントの前

タープの傍らで焚き火の準備を始める波奈。

タープの下には、テーブル・長椅子の用意が済んでくつろげる空間ができあがっている。

焚火をするのはタープのそば、天幕に火が当たらない位置。

波奈はナイフで薪を削り、フェザースティックを作る。

ナイフを扱うため、私には少し離れているように波奈に言いつけられ、私はテーブルを挟んで見守っている。

「んっ……っしょ」

「お……こうかな？」

「んしょ、んしょ……」

「フェザースティック削るのって…ほんとにえんぴつ削りみたいだ」

「……（集中する吐息）」

「で、火を……」

「お……おー？」

「これで……」

「わ、わ……」

「ついた……ついたついた」

「できたよお、見て見て」

少し離れた場所にいた私を呼ぶ。
波奈へ近づく私。

「ね、ちゃんをついた」

「火を点けるのはね、家で練習は、さすがにできなかったから」

「ちゃんとできるんだ……」

「えー……うれしい……」

「フェザースティック、すごい……」

「もうちょっとだけ作っておこうかな」

「あ、ほら、危ないから離れてて」

フェザースティック削りを再開する波奈。

「ん……」

「ん、っしょっと……」

「……このくらい？」

「うん。あとは、適宜」

「ふー……」

「ひとまず、おしまい」

「ね、ね、ね、おいで」

「ほら、焚火あったかいし」

私を呼び寄せる波奈。
隣り合って焚火を眺める。

「いやー……」

「火ってさあ……」

「いいよね……」

「……ふふふ（満足げに微笑む）」

「はあ、すごい……」

「楽しいー……」

「でも、やってるあいだ、離れてて寂しかったので……」

「ちょっとだけいい？ ハグ……」

「やったあ」

ハグするふたり。

「んんんん」

「疲れが取れるう」

「はあ……（満足の吐息）」

「よし、充電完了っ」

身体を離す波奈。

「さて、これで快適に暮らしていく準備はできたので……」

「早速、定番の一品をしようかなと」

「そう。コーヒーを淹れる」

「豆は、今朝挽いてきた」

「こっちでやるの面倒だからね」

「いや、たしかに、面倒くさいことをわざわざするのがキャンプの醍醐味…」

「でも、そのうえでいかに手間を減らせるかというのも楽しみの一つだね…」

「…わかる？」

「…わかってなさそうだ」

「でも、それでいい」

「要するに、私にぜんぶ任せてね…ということ」

「なので、ここではお湯を沸かすだけ。んしょ……」

「…ケトル、かわいい♪」

取り出したケトルを眺める波奈。嬉しそう。

「ではでは……お水じゃーっと」

「で、セット」

「こうかな……グラグラする？」

「ん、直った。大丈夫そう」

「やっと使える……♪ キャンプギア…」

「ん、テントとか大体の道具はね、お姉ちゃんのおさがりだけどね」

「こういう小物は買ってみた」

「コーヒーセットとか」

「マグカップも、おそろい」

「ふふ……（ご機嫌に笑う）」

「……」

焚火を眺めるふたり。お湯が沸くのを待つ。

「……………」

「……はあ」

「……………」

「燃えてる燃えてる……」

「自分でつけた火だから、元気に燃えてると嬉しい」

「焚火したのはじめてだし」

「やったことないことできるのっていいよね」

「……（笑い交じりの吐息。満足げ）」

「そろそろ沸くかなあ」

「お湯あちあちにな〜れ〜」

「……」

「あ、フィルターセットしないと」

「ん、沸いてきた。いいかんじ」

「もういいかな？ 良さそう」

「では……」

グローブをはめてケトルを持ち上げる。

「んゝ……！」

「いい匂いしてきた♪」

「コーヒーの匂い。好きだあ」

「……すんすん（匂いをかぐ）」

「ほら、かいでみて」

「……ね？」

「いいにおい」

「ふふ……」

「自然に囲まれてコーヒーいれてる……」

「この状況が、イイ」

「……きみも一緒だし」

「ふふ。……もっと近づいちゃお」

私に接近する波奈。肩を重ねる。

「ぴとー」

「はぁ、あったかい」

「コーヒーもどんどん落ちてきて……」

「いい匂いで……」

「好きだなー」

「………」

「砂糖いる？」

「シュガースティックあるので、ご自由に」

「わたしはねえ……ブラック」

「おとなだからね」

「っふふーん（得意げに）」

「……よし、もういいね」

「はい、どーぞ」

コーヒーをカップに注ぐ。
波奈は猫舌のため、少し冷ましてから飲む。

「ふう、ふう……あち」

「ふー、ふー……、ふー……」

「ふー……」

「……（一口飲む）はぁ」

「あったかいね……」

「良い……」

「……（一口飲む）」

「はぁ……」

「どう、コーヒーのお味は」

「おいし？」

「でしょー」

「はなさんが心を込めて火をつけて……」

「心を込めて沸かしたお湯でいれたからね」

「いま味わってるのは……私の心……ってこと？」

「うむ。味わいなされ……」

「……（一口飲む）」

「はふう……」

「美味しい？」

「よかったよかった」

「はぁ……」

「……（一口飲む）」

「……ふう」

「ふー……」

「……（一口飲む）」

「おいし」

「ね」

「……（微笑み）」

「はー。それじゃ、この流れで。夕飯、始めますか」

「まだ明るいうちに始めちゃったほうがいい」

「山は日が暮れるの早らしい」

「すぐ真っ暗になっちゃうんだって」

「夕飯は、B B Q……的な？」

「これ、……（荷物をがさごそする）」

「うん。野菜はね、もうカットしてある」

「お肉は……さっきスーパーで買ったやつ、切れてるやつ」

材料を出し、机に並べながら、

「あとソーセージと……」

「カマンベールチーズ」

「これは最高ですよ……大好きなの」

「これを鉄板で焼くだけ」

「包丁の出番ナシ」

「調味料振って終わり」

「アウトドアスパイスっていうのがあって、おいしいの、これ…」

「ぜひね、試してみてください」

「で、んしょ…」

「鉄板あったまるの待つ」

「……………」

「どれどれ…」

「ん、……いいかんじ、かな？」

「よし」

お肉のパックを開け、鉄板に割りばしで並べる。
ジップロックの野菜も並べる。

「わー、よいぞ、よいぞ……」

「BBQとか、何年ぶりだろ」

「小学生とか？」

「高校では、やったことなかったね」

「え、中学でやったの？ えー、楽しそ」

「林間学校かぁ」

「うちカレーだったな……無難」

「えー、いいなあ。マシユマロとか焼きたかつ……」

「ア……!？」

「マシユマロ…忘れた……!？」

「うわ……完全に忘れてた……」

「マシユマロ焼かないのはうそじゃん……?」

「えー……」

「しょぼぼんだね……」

「めそ……」

私の肩に顔をうずめる波奈。

肩に口を埋めたまま、くぐもったかんじで甘えて尋ねる。

「……また一緒にキャンプしてくれる?」

「…マシユマロリベンジ」

「ほんと?」

「約束ね?」

「……やさしー」

「すき……」

顔を起こす波奈。

「それじゃあ、マシユマロはこんどのお楽しみにしておこ……」

「ふふふ……」

「うん。メンタル大復活」

「だいじょぶ。ほかに美味しいもの焼いてるからね」

「で、で…、林間学校…：楽しかった？」

「（私の答えを聞いて）…：あはは、疲れたか」

「マシュマロは？ 焼いた？」

「えー、禁止だったの？ ざんねん」

「私は…：うーん…：楽しかった、けどね」

「でも今思うと…：君と一緒にだったらもっと楽しかったなあって」

「言い出したらキリがないけど…：」

「もっと早く出会えて、小学校、中学校って一緒に過ごしてみたかったなあ」

「たまにそういう夢、見る」

「小学校の思い出の夢なんだけど、ふつゝ一緒に教室にいるっていう」

「過去の捏造が始まって…：」

「もう少しいたら、妄想と現実の区別がつかなくなるかも…（笑う）」

「やだ？」

「妄想の思い出を語り始めたらごめんね？」

「そうならないように、これからいっぱい、出かけたり遊んだりしたいな」

「……せっかく付き合ってるんだから」

「ね」

「……ふふ（はにかむ）」

「ほら、できたできた。よく焼けてる」

「これ食べて、あ、スパイス振って……」

「熱いから気を付けてね」

「ふーふーする？　してあげるよ」

「照れんなよお」

「ほら、ふーふー」

「ねー、ガチ拒否やめてください（笑う）」

「はいはい、どーぞ、冷めないうちに」

「私は置いとく。猫舌だから」

「……ふーふーしてくれるの？」

「しないんじゃないん（笑う）。期待したー……」

「セルフでふーふーするし」

「ふーふー……」

「ふー……」

「ふーふー……、あむ、あちっ」

「……ふーふー」

「んむ……ん♪ んー♪」

「……おいし！」

「……おいし？」

「良かった」

「どんどんお食べ」

「…よしよし」

「いただきます」

「……あち、はふ」

「ふー、ふー……」

「おいし……」

「んん……（咀嚼）」

「はあ。おいしいねえ……」

「……（咀嚼）」

「スパイス、まじウマ……」

「野菜も、甘いい」

「焼いただけでも美味しいんだなあ……」

「……（咀嚼）」

「あ。なんかいつの間にか日が暮れてる」

「やっぱ暗くなるの早いねえ……」

「……………（食事を続ける息遣い）」

「……（微笑み混じりの吐息）」

「……あむ（ソーセージをかじる）」

「うわ」

「ソーセージやばあ」

「うまつ……」

「……あつ。忘れてた」

「いいのあるんだった」

「ほら、これ」

「ちょっとぬるいかな？ でもいいよね」

「飲も飲も」

「へへへ……乾杯♪」

「（お酒を飲みながら）……んく、ん、んっ……はあ……」

「はー……」

「最高……」

「んく、ん……（お酒を飲む）」

「はあ……♪」

【EP03：いつもと違う場所だから】

○場所：テント

テントに入った二人。

寝転がって寄り添って、お互いにスマホを覗き込んでいる。

スキンシップに抵抗のない二人は身体をくっつけあってリラックス。

就寝までの間、まったり過ごす。囁き声での会話。

「……」

囁き声で話しかける波奈。

「ねえねえ」

「なんかさあ…、…（楽しそうに笑う）」

「こんなに静かだと、声出して喋るの、ためらう」

「そんでさあ…」

「……結局ここへきてまでやることは二人してスマホ…（笑う）」

「現代人の敗北を感じる」

「……でも楽しい」

私にすり寄る波奈。

「ね。居心地いいねえ」

「……（まわりの音に耳を澄ませる）」

「……静かー……」

「そうそう。今日空いてたの。ラッキー」

「日程がよかったのもあるけど…」

「あのね、最近このあたりにグランピングサイトができたんだって」

「グランピングって言うのは、キャンプ場よりも色々用意されてて」

「だから利用者はなんにもしないで済む」

「略さず言うと、グラマラスキャンピングっていうらしい」

「そうそう、すごいお洒落な。キラキラなやつ。映えるやつ」

「そっちも、テント持ち込んでもいいみたいで」

「で、すごい整った設備のなかでできる」

「だから、多分、今ならこっちは空（す）いてるかな？　って思った」

「ふふふー、大当たり」

「はなさん、かしこいぞ？」

「褒めて褒めて♪」

私に撫でもらう波奈。

「（ご機嫌な吐息、笑い混じりに）……ふふー♪」

「んー…」

「まあ、グランピングのほうが楽は楽だけとお……」

「でも自分でやって楽しいのは、断然こっち」

「はなさんはね、自分でやってみたかった…」

「意外と、できて、嬉しい」

「やったことないことも、やってみたら、できた」

「…いつもさ、私の挑戦をただ見守ってくれるじゃない？」

「それが嬉しい」

「お姉ちゃんたちはさあ…：わたしが末っ子だから…」

「『あぶないからやめておきな』とか…、『貸して、やってあげる』とか」

「わかるよ？　それも、愛ゆえ…」

「だけど…私はもっと信じてほしかったんだ」

「『波奈ならできる。やってごらん』って、見守ってほしかったの」

「でね、その点、放任主義…」

「えーと…マイペースで、お構いなし…：え、悪口じゃないよ」

「…少し離れて見守ってくれてる」

「いつも私に任せてくれるから」

「そーゆーとこ…一緒にいてスキなの」

「…：ふふ」

「ん、うん。はじめて話した」

「なんでだろ」

「いつもと違う場所だから？」

「なんか…気持ちも開放的に…？」

「伝えられて嬉しい」

「……すき」

「ん。……これはいつも話してること」

「うりゃうりゃ」

私に頭をこすりつける波奈。甘えている。

「あはは。楽し」

「…一緒に暮らしたら、こんなかんじかなって今日思ってた」

「や、や、料理はちゃんとコンロでやります」

「（笑って）賃貸で火をつけるところから始めないよ」

「（笑って）持ち家でもやらないけど」

そういえば、とスマホのブックマークを開く私。

かねてより二人で探していた同棲のための賃貸に目星をつけていた。

「あ、いい物件見つかった？」

波奈、私のスマホを覗き込む。

物件情報を眺めながら

「あ、ほんとだ。良さそう。外観かわいい」

「見せて見せて」

「ベランダつきー♪」

「キッチンもきれい、コンロが2口あるしシンクも広い…」

「えー、いいじゃん。いいじゃんここ」

「あ、お風呂、追い炊きあり？」

「これは嬉しい」

「（概要欄を眺めつつ）ん…ゴミも捨てやすそうだし…」

「うん、見に行こ行こ」

「まわりの環境も気になるね」

「スーパー、近いみたい。コンビニも」

「駅前、ちょうどいいかんじ」

「栄え過ぎず、寂れ過ぎずなかんじ？」

「このあたり、商店街も元気ありそうでいいな…」

「いつ行けそう？」

「（ちょっと驚いて）来週？」

「ううん、予定ないない」

「びっくりした、乗り気じゃん」

「だって面倒くさいでしょ、引っ越し」

「私、まだちょっと心配してるよ」

「勢いに押し負けて流されてない？　って」

「他人と一緒に暮らしはじめるって、結構な変化でしょ？」

「暮らし方いろいろ変わるだろうし…面倒じゃ、ない？」

「（面倒じゃないと言われて喜ぶ）んふ、んっふふ…」

「めずらしい。…前向きなかんじ、嬉しい」

「…：よろしい。家のこと、はなさんがゼーんぶやってあげよう」

「任せて任せて」

「（冗談めかして）私なしではいられない身体にするのが楽しみ」

嬉しくなった波奈は、私のほっぺにキス。

「（ほっぺたに）ちゅっ」

「（微笑み）…：楽しみ。ふふー」

「……………（吐息）」

「…：んー…：」

「そろそろ寝ようか」

「どうせ朝は早く起きちゃう」

「太陽が上ったら、眩しくて目が覚めちゃうよ」

「だから早く寝たほうがいいって」

「……うまく寝れるかなー」

「ま、一旦ね」

「ランタン消すね」

それぞれ寝袋にもぐる。

毛布をかけたたり、ファスナーをあげたり、寝支度の音。

「…毛布足りそう？」

「寒くない？ ん、よかった」

「………」

「……それじゃ、おやすみ」

「（静かな吐息）……」

「（静かな吐息）………」

「……」

「んー……」

もぞもぞと、寝返りをうつ。
入眠に難儀している様子。

「………（ため息）」

「だめだあ」

「楽しい気分のまんまで、眠れないかも…」

「……どう？ 眠い？」

「ねー、だってまだ9時前…」

「起きちゃうかぁ」

「……お散歩いく？」

「よし、ちょっと歩こう」

寝袋を這い出る。ブランケットを羽織る。

テントの外へ出るため、テントのファスナーを開ける。

外へ出るふたり。

【EP04：流れ星、見えた？】

○脱衣所

マグライトで足元を照らしつつ、キャンプ敷地内を散歩する二人。

「……………」

「……暗いね」

「まっくら」

「……」

「……………（足音にあわせ、自然な吐息）」

「（つまずいて）わ、とと……」

「柔らかい地面って、歩きにくいんだ」

「転びそう…」

身を寄せ合う二人。手を繋ぐ。

「手、繋いでたら安心だね」

「ぎゅってしておこ…」

「……」

「なんかやっぱり、声ひそめちゃうね」

「あ…向こう、テントある。お客さん、一応ほかにもいるんだ」

「いいテントをお使いですねえ…」

「……………（歩行中の合わせた自然な吐息）」

「そうそう。朝はね、温泉入れるよ」

「受付の向こう側にあるの。温泉」

「朝風呂。貸し切り」

「ん……楽しみ…」

「お風呂一緒に入るなんて、ひさしぶりだし」

「へへー、楽しみ、楽しみ」

「……………（楽しそうな吐息）」

「……………（足音にあわせた吐息）」

「木、すごいね。さすが、おっきい」

「背が高い……………」

「いいなあ」

立ち止まる二人。木を見上げる。

「鳥……………フクロウとか、いるのかな」

「ムササビとか」

「（周囲を見渡して）……………見えない…かあ…」

「目がよくない。ビタミンAが足りない…」

再び歩き出す二人。

「……高校の頃に、」

「こんなふうに、ふたりでお出かけするなんて想像しなかった」

「…あの頃の自分にさ、私たち未来でこんなことしてるよって教えたらさ、」

「（笑って）…どんなふうに思うかな？」

「びっくりするとは思うけど」

「二人でキャンプに行くよ、って」

「……もうすぐ一緒に暮らすんだよって」

「…付き合ってるんだよ、おふたりさん、って」

「……（くすくす笑う）」

「予感とか、なかった」

「…憧れてたけど」

「…だから…嬉しい」

「こうやって、今も、一緒にいること」

「あの頃は…想像もしてない」

「高校卒業したら…そのあとどうすれば会えるのかな？　って」

「もう会えなくなっちゃうんじゃないか…って」

「三年生のときは、すごく心配してたよ」

「…へへ」

「（嬉しい気持ちで）心配いらなかった、けど…」

「でねでね、それもあって…あの頃は卒業したくないなって」

「ずっと高校生でいたい…って、思ってたなあ」

「…大人になるの、…あの頃、やだなって思ってた」

「…けど」

「今は…できることが増えて嬉しい」

「車乗って好きなところ行ったり、おいしいお酒飲んだり」

「自分で稼いだお金で、誰にも文句言われず買い物したり」

「マンガ全巻大人買いしたり…、衝動買い（笑）」

「門限とか、は…まだちょっとうるさい、けど…」

「こうして大好きな人と一緒にキャンプ来ちゃったりしてさ…」

「私は…とっても、今、うれしい」

「ありがとね、いつも」

「私のしたいこと、付き合ってくれてさ」

「文句…は言う…けど…でも結局乗ってくれるからさ」

「気が変わるまで説き伏せるのも楽しみのひとつかも」

「どのポイントで心変わりしてくれるんだろ？　って」

「ね、大抵『面倒なことは私がやるから』っていうと…落ちるでしょ（笑う）」

「でも現地に来るとわりと手伝ってくれたりするじゃん」

「あれだよ。出発するまでが億劫な人、でしょ」

「私は準備するのも好き」

「だから任せて」

「いろんな場所、連れていきたい」

「…お楽しみに」

立ち止まる二人。頭上の星を見上げる。

「わ…見て、空、星綺麗」

「流れ星とか、見えるかな？」

「ん……（目を凝らす）」

「……あるかなあ」

「……目が…日頃の眼精疲労が…」

「ん……（目を凝らす）」

「（足元がおぼつかなくて）おっとと…」

「上ばっか見てるとバランス変になるね」

「……ん、捕まえておこう。お互いに（笑う）」

「……（眺めている）」

「じっとしてるとちょっと寒い…」

「んしょ…、そんなときのためのこれを…」

「ストールを…ぐると…」

ストールと一緒に羽織るふたり。

「（間近で、笑って）…くつついちゃった」

「あったかい…」

「（きみはどう？というニュアンスで）…あったかい？」

「（私が頷くのを見て）…よかった」

「……（隣り合って、頭をくつつけあう）」

「……（微笑む）」

「（ごく至近距離で）流れ星、見えた？」

「お願い事とか…」

「しなくても、まあいいか」

「結構叶ってるかもしれないし…」

「自分で叶えていくのも楽しい」

「……（楽しそうな吐息）」

「……（静かな吐息）」

「……そろそろ戻ろっか」

「………（歩行中の自然な吐息）」

【EP05：ただいま、ふたりのお家】

○テントの前

テントの前へ戻ってきた二人。

肌寒いため、椅子に座って身を寄せ合う。

寝る前にあったかいお茶を飲もうと用意する波奈。

「これは朝使おうと思ってたんだけど…」

「お手軽にお湯沸かそうかなって」

荷物からシングルバーナーを取り出し、組み立てる。

「シングルバーナー」

「コンパクトでかわいい」

「ケトルも、ちっちゃいやカンみたいなやつ」

「じゃーっと」

「すぐ沸くので」

「……火つくとあったかいね」

「寝る前だから、カフェイン入ってないハーブティ」

「…こんなこともあるかと。持ってきてよかった」

「……………」

お湯が沸くのを待つあいだの沈黙。

二人は身を寄せ合っている。

手を繋いで、指を撫で合うスキンシップ。

「（笑い交じりの吐息）……」

「……くすぐりたい」

「肌すべすべ」

「……（吐息）」

「…はあ、あったかい」

「……（吐息）」

「お……」

「聞こえるね。ふつつつ、くつくつ」

「お湯沸いてきた」

「……」

「そろそろかな」

手を離して、お茶を淹れようとする波奈。

だが、私は手を繋いだままほどこうとしない。

「……おやや」

「手を離してくれないと、お茶淹れられませんよ?」

「さみしいけど…」

手をほどく。波奈もちよっと惜しそう。

「……ちょっと待っててね」

「ん……」

「湯気がもくもく……」

「あったかい」

「……できた」

「どうぞ」

「好みの濃さで」

「まだあつい……、ふーふー……」

「ん……ふー、ふー」

「……（ちょっと飲むが、まだ熱いので口を離す）」

「ふー、ふー………」

「……ふー」

「………（ちょっとずつ飲み始める）」

「……（嚥下する）」

「（しみじみと）はぁ……、あったかい……」

「全身あったまる……」

「なんか、ぽかぽかになる的なハーブティ」

「スパイス？ 分かんないけど」

「匂いもなんか、ほっとする……」

「すんすん……（軽く匂いを嗅ぐ）」

「すう……はぁ……（深く匂いをかぎ、深呼吸）……………」

「ん……好きな匂い」

「……ん……ずずっ（熱いので啜りながら飲む）」

「……ずずっ……（飲む）」

「はー………」

「………（温まってきて、ぼーっとする）」

「ふう……（心地よい吐息）」

「……おかわりは？」

「ごちそうさま？」

「はい」

「……なんか、眠れそう」

「ね、ぼかぼかしてきた」

「じゃ、おうちに帰ろうか」

「うん。（笑って）ふたりのおうち」

「ここ、片しちゃうね」

「ん………」

「しょっと………」

「おっけー」

私から先にテントの中へ。
続いてテントに入る波奈。

「ん……」

「お、っと……」

足元が平らではないテントのなかで、バランスをくずし、
私に支えてもらう波奈。

「（笑って、耳元へ、照れつつ）……ごめん」

「……ただいま」

「（唇を軽く重ねて）……ちゅっ」

「（耳元に囁き声で）寝袋くっつけていい？」

「さっきよりも……」

「……ありがとう」

「じゃ……」

しゃがんで、寝袋をくっつける波奈。

「よいしょ……」

「これで、よし……」

「（笑みを含みつつ）……おやすみ」

「（さっきよりも小さな囁き声、無声で）……おやすみ」

「……（含み笑いの吐息）」

「……………（静かな吐息）」

「……ふわ……（控え目な欠伸）ん……」

「……………（少しずつ寝息になる息遣い）」

【EP06：寝起きのおさんぽ、朝を吸う】

○テントの前

翌朝。目を覚まし、テントの外へ出た私。

波奈は先に目を覚ましていて、お湯を沸かしてくれている。

波奈は、目は覚めているが、まだ眠気を引きずった声。

「…あ。おはよ」

「……（微笑む）」

「よく寝てたね」

「安心してた。寝心地悪くなさそうで」

「……寝顔も見てられたし」

「……（リラックスした吐息）」

「私は…」

「鳥の声で起きちゃった」

「すごいよね」

「鳥の声で起きる体験（小さく笑う）」

「で、ちょっとあったかいもの飲もうかなって」

「今できたところ」

「どうぞ」

ベンチに腰掛ける二人。寄り添う。

テーブルのうえにホーローカップがふたつ。

私はそれを飲み始める。猫舌の波奈は冷めるのを待っている。

「……………（まだ少しか眠たげな吐息）」

「んー…………ふわあ…………」

「ん、ちょっと眠いけど…………」

「だって今、まだこんな早く…………」

スマホの時計を見せてくれる波奈。

「だけど、こんなに明るいな…………」

「……………」

カップを手取る波奈。

「ふー、ふー…………」

「ん…………ずず…………（ゆっくり飲み始める）」

「……………あゝ」

「なんか沁みる…………」

「生きてる感じ…………身体が…………細胞が…………」

「は…………」

「……………（まったくした吐息）」

鳥の声や木々が揺れる音に耳を澄ませる波奈。

「……………」

ゆっくりと周囲を見渡している。

「…………ふふ」

ふと、私と目が合って微笑む。

「朝ごはんは、お風呂のあとね」

「ホットサンド作るんだ」

「（笑って）……………楽しみにしてて」

「さて…………（カップの中身を飲み干す）」

「ふう。お待ちせ」

「お風呂行こうか」

カップを置き、立ち上がる二人。
車から着替えなどの荷物を取り出す。

「じゃあ出発」

歩きだす二人。

「……………（歩行中の自然な吐息）」

「……………はぁ……………（深呼吸）」

「んーっ…………（伸びをする）」

「なんか空気がキラキラしてる気がする」

「朝露ってこんなきれいな？」

「自然界…すごい」

「身体じゅうで、『朝』を吸ってる…」

波奈、歩きながら段々完全に目が覚めていく。

「晴れて良かったね」

「お風呂、露天だから」

「気持ちいいよ、ぜったい」

「……………（深呼吸して）はぁ」

「テントのなか、結構寝れた…」

「寝れるもんだね」

「わりとぐっすり」

「身体ちょっと痛い気はするけど…」

「でも思ってたよりは全然」

「…………ふふ」

私を見つめる波奈。嬉しそう。

「いや、うん。寝起きの顔してるなあって」

「かわいいなあって…」

「わ…私のは見ないで。だめ」

うつむく波奈。私は迫って、波奈の顔を覗き込む。

「わ、わ、こらこらあ」

「…待って、待って待って」

「寝癖もすごいし、寝袋の痕すごい気がする…」

「いやもう見られてるけど」

「でもじっくり見られるのは違うじゃん」

「……（吐息。照れ臭さ）」

「……お互い様ね。お互い様」

「っ……ふふ」

二人で笑いあう。

「はあ……（笑いを引きずりつつ）」

「……」

「夜このへん歩いたけど、全然景色見えてなかったね」

「鳥……どこにいるんだろ」

「こんなに鳴き声してるのに」

「あんまり見えない」

「保護色ってやつかな」

「鳥見るやつ持ってきてもいいな、今度……」

「…双眼鏡か」

「これだけ自然に囲まれたこと、ほんと高校ぶりかも…」

「……すう、はぁ……（深呼吸）」

「……（深呼吸）」

「あ、橋だ」

「そうそう、目印だって」

「お風呂、橋渡った向こうなの」

敷地内の小川にかけられた橋を渡る。

「あの建物かな」

「うん、あれだね」

「行こう行こう」

【EP07：おっきいお風呂、ふたりじめ】

○露天風呂

屋根付きの露天風呂のなか。

湯舟につかる二人。横並びに寄り添う。

波奈は湯船につかりながら、身体をいっぱい伸ばす。

「（身体を伸ばす）んんーっ……！」

「（脱力して、しみじみと）……ふああ………」

「気持ちいい……」

「ああ………」

「やばいい……」

「明るい陽射しを浴びながら……お風呂……」

「最高……」

「朝風呂って気持ちいいんだ。知らなかった」

「（身体を伸ばして）くう……、ん……」

「昨日、結構身体動かしてたんだね……」

「あとやっぱテント、狭いから」

「身体強張ってたみたい」

「はぁ……………」

「癒される……」

「……最高……」

「……………（リラックスした吐息）」

「ふふ……」

「おっきいお風呂も久しぶり」

「こんなに最高なら、もっと銭湯とか行こうかな…」

「あゝ、そうだ」

「借りる部屋の近くにも、銭湯あるといいよね」

「そういうとこって、コインランドリーもあるから」

「なにかと便利」

「お布団とか、大物？　そういうのも洗えるから」

「（笑って）うん、探してみよ」

「……………」

湯舟の中に座る波奈。

「んー……うれしいなあ」

「実現するんだなってかんじ……」

「だって、こんなふうになるなんて」

「あの頃は想像してなかったから」

「二人で、一緒に暮らすこと」

「……いろんな場所に、一緒に出かけることも」

「お泊りすることも……」

「貸し切り温泉入ってることも……（微笑み）」

「出会った頃は……」

「話しかけるのも、すごく勇気振り絞ってたから」

「うん。一年生の時」

「入学式の日から、気になって……って、話したことあるよね」

「口数少なくて、ぱっと見、クールでさ」

「ひとりで、なんでもできそうに見えてた」

「……今は、そうじゃないの知ってるけど」

「それが嬉しい」

「第一印象からは分からなかったこと、色んなこと、もう知ってるから」

「……まだただだけど」

「……ふふ」

「お喋りできた日は、嬉しくて」

「その週は、ずっと幸せだったなあ」

「今は、毎日幸せだ…」

「知らなかった？」

「…そうなんだよ。本当」

「………（ふー、と吐息。ちょっと火照ってくる）」

「一緒に暮らし始めたら…どうなっちゃうんだろうね」

「………楽しみ」

寄り添って、湯舟の中で手を繋ぐふたり。

「楽しみだよ」

「ドキドキしてる」

「毎日会っても飽きないよ」

「………心配してるの？」

「私のほうが心配…（苦笑）」

「気まぐれ屋さんの、気分屋さん」

「でも、飽きさせないよ？」

「私なしでは生きられない身体にする予定だし…」

「だって私、（指折り数えながら）…美味しいごはんつくれるし、遠くまで車運転できるし、家事はだいたい好きだし」

「…優しいし、ぎゅーってするし、よしよししてあげるし」

「一緒にいると便利で快適な波奈さん、一家に一台欲しくない？」

「……（笑って）でしょ」

「……（微笑む吐息）」

「一緒に新しいことできるの、いつも嬉しい」

「（耳元へ、無音の囁き声で）……好きだよ」

「大好き」

「だーいすき」

「……（笑う）」

私の肩に頭を預ける波奈。

「ふー」

至近距離。のぼせてきて、まだ眠気もあり、
けだるく、囁き声の会話。

「ちょっとしたぼせてきた」

「……帰りどこ寄る？」

「食べたいものとかあれば、寄るよ」

「あー……来る途中、牧場あったね」

「牧場のアイスは……まちがない」

「ぜったい美味しいやつだ」

「……うん。寄ろ」

「お姉ちゃんたちにもお土産買ってかないとだし……」

「一応。テントとか貰ったお礼にね」

「……（吐息）」

「……また来ようね」

「マシュマロも焼いてないし」

「（笑って）うん、いっぱい焼こ。山ほど焼こう」

「（身体を伸ばしながら）んんー……っ」

「はあ」

「……きもちいい」

「……（リラックスした吐息）」

【EP08：エピソード／エネルギーチャージ】

○キャンプ区画

すべての片付けが済み、荷物の積み込みも終盤。
車に荷を積む波奈と、サポートする私。

「んん…んん？」

「荷物増えてないはずだけど…」

「なんか入らない」

「なんでー」

「……できる？」

試しに荷物を積み直してみる私。テントのパーツなど。

「わ、できた」

「うん、ドアも閉まりそう」

「ありがとう…！」

「じゃ、乗って乗って」

私は助手席へ、波奈は運転席に乗る。

「えーと、一応確認」

「忘れもの、ないかな？」

「大丈夫そう？」

「おっけー」

「……あ」

「たいへん」

「忘れてた」

「燃料補給」

「うん。このあと車を運転するために大事な…」

「波奈さんの気合い補給」

「（私へねだって）……ちゅーしてください？」

「……ちゅっ」

「……ふふ」

「満タン♪」

「それじゃあ……おうちに帰るまでが、キャンプですので」

「安全運転で、送り届ける」

「任せて」

「……（笑い声）」

「また来ようね。一緒に」